

音響學に Tyndall の Sensitive flame といふものがある。高壓の gas が細孔より噴出して點火せられたる白熱の長い燐であつて一實に微細な高調の音波に遇ふて忽ち燐の長さや形が變化してしまふ。Delicate な Sentimental な若い女性の心理は實によくこの Sensitive flame で代表されると思ふ。

此の如き立脚地から見ると Exact Science で頭を練ることは平素の用意によつては人の弱點を矯めて忍耐の氣質を増すに與つて力あるものと信ずる。つまり彈性が増して強くなる脆くなくなる。Logical Training が習慣になると飛んだり跳ねたりの Discontinuous な論法をやらなくなる。つまり Reasonable になるのである。

色 の 配 合

赤や黄は恐らく幼稚の色なるべし。その證據には人の幼きをは赤坊と名つけ、赤ちやんといひ、赤い襦袢や黄の着物を着せて怪むことなく、又似合ふも可笑し。野蠻人は赤い物が好きなるが故に某外國のマツチ商人はその箱を赤く染めて販賣したるが爲めに巨利を博したりといふ。我等も亦マツチの箱の赤きを見て怪むことなし。その聯想も亦可ならずや何となれば金石も之を熱すれば赤くなる。赤は必ず熱に伴なう色なり。熱の初めは赤く次に變じて橙色より黄に移り青味を帯びて遂に Arc

燈の如きは紫の火を飛ばす之を白熱の状態といふ。

試みに其の[スペクトル]を檢査するに白光は凡ての色を含みて餘す所なし。

物理の傳ふる所によるに赤より紫に至るに従て光は次第にその波長を減じて細かくなり同時に振動數を増す而もその傳はる速さは[イーター]の中に於ては同一なりとかや。

人の肉体及び精神の發達も亦然り、若い者は何事にも熱し易く老人は心冷かなり、赤き心赤き燐は凡て Energie の表示にして以白眼對之などいへば冷淡といふことを表はすにあらずや。その他紅顔の美少といへば若く美しいのを指し白髪といへば血の氣のなき老人を聯想す血といへば成る程赤い腦の色は灰白色に近し。

坪内逍遙の書ける文學その折々といふ本の中に英文の詩などを引用して人生の四季といふことを面白く説きたるものあり。恐らく人生のみならず人性の四大別たる多血質粘液質膽汁質心經質

Sanguine, Phlegmatic, Choleric, Melancholic.

も亦必ず之に相當する色彩あらん。赤が多血質ならば白は[メラノリック]にやあらん。

西洋で金髪といひ我國では緑の黒髪といふ人の眼に最も強く感ずる色は黄と緑との間にあるも可笑し。

紫の雲の上といへば人は期せずして紫の色を貴きことの「シムボル」となしたるにやあらん。

思ひ出の記の中に——戀人が觀する薔薇色の天地聖徒が觀する白光の天地——の句あり。眼は實に貴く便利なるものなり。便利なるものは多く不完全なるものなり。Helmholtz 先生は耳に於てその精巧に驚き眼に於て造化の不備を嘆したりといふ。世の中には色盲といふ奴あり。眼の色盲は未だしも心の色盲に至りては恐ろし眼鏡を以て周圍を觀る。故に西洋にも Mind's eye なる話あり、心の眼による判断にあらざれば信じ難しとなり。

榎木の僧正は腹黒き人にておはしけりなどいへば何も蚊も知て居て知らぬ振り何か悪い事を謀る奴を腹黒き人といふも可笑し。衣服を着るにも内に黒きものを用ひ外に色淡きものを用ふるは何となく釣合悪し、内に色淡きものを用ひ外に色濃きものを着くれば似つかはしと或人は申したり。

葬式に白きものを用ふるは如何若し赤黄緑を用ひなば如何あるべき人世の務を終へて此の世を去るものば神聖の表章たる白をもて包むなり。

古人の格言の物理的解釋

人類學といふ妙な學問はあれども未だ人間學といふ名は聞いた事がないが、極く極く狭く解釋をすると人間學は實踐倫理要頂とでも名つけては如何あらうか。人類學は俗人には往々學者の骨薫いぢりと撰む所のないやうにも見ゆるが、人間學はどうも一日も忽にすることが出來ない。それが死んだものを取扱ふとちがつて此の生きた千變萬化する人間に應對する一舉手一投手の調節であるから實に六かしい。

それ故吾々は何か定つた一つの方針によつて行動することも宜からう、たい此う見ゆるから此う判断する此う思ふからかく判断するといふフュニニロデツクでは危険である。つまり何等原因結果の關係のない處に飛んだり跳ねたりの推測をやつて居ることもあるであらう。

私は小説などを讀む毎に如何に小説家の意地悪く人の運命を翻弄するものであるか又人の弱點を捕へて人生の波瀾を描くものであるかといふことについてその中の人物が若し數學的又は物理的の考へ方で進んだならかゝる誤は無かつたであらうと嘆息することがある。

それ故小説家などいふ者は多く不幸短命に終るもの